



社会语言学视点下的清代汉语与其他言语的对音研究

——以日本近世唐音资料·满语资料·罗马字资料为中心

杨春宇 著



 辽宁师范大学出版社

社会语言学视点下的清代汉语与其他言语的对音研究
——以日本近世唐音资料·满语资料·罗马字资料为中心

社会言語学の視点からの清代漢語と他言語の対音研究
—日本近世唐音資料・満語資料・ローマ字資料を中心に—

Contrastive Study of Phonemes between

Qing Dynasty's Chinese and Other Languages in Sociolinguistics

—Concentrating on Pre-Modern Chino-Japanese documents, Manchu documents and Romanized documents

楊春宇 著



遼寧師範大学出版社

© 杨春宇 2007

图书在版编目 (CIP) 数据

社会语言学视点下的清代汉语与其他言语的对音研究 / 杨春宇著. —大连:
辽宁师范大学出版社, 2007.11

ISBN 978-7-81103-688-6

I. 社... II. 杨... III. ①汉语-音韵学-研究-清代 IV.H11

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2007) 第 177207 号

出版人: 程培杰

责任编辑: 李 珍

责任校对: 刘月娜

封面设计: 韩 雪

版式设计: 孟 冀

出版者: 辽宁师范大学出版社

地 址: 大连市黄河路 850 号

邮 编: 116029

营销电话: (0411) 84206854 84215261 84259913 (教材)

印 刷 厂: 大连金华光彩色印刷有限公司

发 行 者: 辽宁师范大学出版社

幅面尺寸: 210mm×285mm

字 数: 610 千字

印 张: 28.75

出版时间: 2007 年 11 月第 1 版

印刷时间: 2007 年 11 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978-7-81103-688-6

定 价: 75.00 元

本书由
辽宁师范大学
学术专著资助出版基金
资助出版

BENSHUYOU
LIAONINGSHIFANDAXUE
XUESHUZHUANZHUZIZHUCHUBANJIJIN
ZIZHUCHUBAN

序 I

案头端放着杨春宇博士赐寄的日语文本博士论文，其标题似乎可以汉译成《基于社会语言学视角的清代汉语与其他语言的对音研究——以日本近世唐音资料·满语资料·罗马字资料为中心》，这么悠长的论文题目和杨博士的鸿篇巨制一样，在中国国内应属罕见。博士的大作要付梓出版，期待我写一点文字作为序。我旅日问学十五载，际遇春宇，甚为幸。既是同胞，又是同行，故乐而勉为之。

清代是汉语史研究资料最丰富多元的一个时代，不仅如此，它还与现代汉语紧紧相接，清代汉语是汉语历时研究中承古启今甚为关键的一个环节。许多汉语共通语及其方言的发展过程的究明都呼唤和等待着这一研究领域的成果更新和知识积累。遗憾的是，清代汉语的研究起步甚晚，人才匮乏，许多材料还在沉睡中，一些领域尚属空白。在近年来逐渐形成的令人宽慰的清代汉语研究气候中，杨博士的作品问世了。其独特的角度、崭新的材料、丰富的参照和引人入胜的结论势必给清代汉语研究，尤其是其中的语音研究领域带来新风和反响。

清朝从建国开始就与外族语言结下宿缘，在王朝由盛转衰，最终走向共和的三百年间，与外国和外族有多方面多色彩的交往和关涉。在起承转合和喜怒哀乐的交替中，历史在前行，时势在造就，各种文献也应运而生。清代是汉语与其他语种交流碰撞最多的时期，本书所涉及的日汉、满汉、欧（欧洲文字）汉对音文献正是这一时代的必然产物。杨博士集多种对音材料于一身，展开清代汉语官话音的综合研究，独具慧眼，高人一筹。

官话是近代汉语语音研究中最毋容避免而又最不可明喻的话题。官话一词起源于明代，而官话的前身可以上溯到比它早两千年孔夫子间或使用的“雅言”。官话是全国各地作官的人嘴里说的话，因与老百姓的方言土语无关，本也互不犯碍。但最大的官员们都集合于朝廷，于是官话基准就和首都扯在一起了。又官话不能是波兰人柴门霍夫制造的世界语，它有自然语言的基础，因此官话又有了地域性的讨论。北宋以前首都多在长安洛阳一带，但从南宋起，历代首都都有了南北之分，北边的首都也往东移了。在众多的争议中，还是北京南京之对立最多，加上汉语本身有南北方言之分，又南方人的官话怎么也得没有北方人那么地道正格，因此问题就愈发交错纷繁了。但终究，官话是北方的土特产，北方的官话是南方的官话的渊源，南方的官话是北方的官话的延伸。北方的官话是具体的，是以自然语言为基础的，南方（尤其是非官话方言区的）的官话是抽象的，是不以自然语言为基础的。

官话音不是标准音，因为在普通话推广之前中国历史上没有出现过任何一次语音规范运动，没有规范就谈不上有标准。语言向心心态也不等于标准的树立，这就像拼命想说好普通话和真正能说好普通话绝非一回事一样，足以说明问题。因此官话音从总体上来说是的广泛的，非唯一性的。北方的《韵略会通》、《等韵图

经》、《御制增订清文鉴》、《五方元音》、《语言自迩集》反映的是官话音系，南方的《西儒耳目资》、《切韵声原》、《古今中外音韵通例》、《官话新约全书》、《西蜀方言》反映的也是官话音系，国外的《四声通解》、《葡汉辞典》、多种形式的日汉欧汉对音资料反映的也是官话音系，连《洪武正韵》、《音韵阐微》等具有语音保守性倾向的官韵，也不能排除在官话音系之外。历史给后人留下一大批语言文献，文献是否记录的是官话、是否如实地传达了语音真实、是否有仿古滞后或拼和硬凑的痕迹、是否有审音不精或官（官话）方（方言）杂糅的缺陷，文献记录的官话是什么状况以及怎么去看这些现象，又该怎样去重建一个官话音系，该怎么看待各种资料反映的相互异同和解释它与现代方言的来龙去脉，该怎样去描述一部真正的官话史，这些都需要学者们通过挖掘爬梳、排比归纳，去精审明断，去小心翼翼地揭开历史的面纱，去重现隐没在混沌后面的语言真实。各自的结论不免仁智互见，学术自由，本属幸事。任尤重而道更远，杨博士正是一位充满朝气和才华，不惧畏途，负重行远的实践者。后生可畏，未来属于后生。

丁 锋

书于东瀛储砥居

二〇〇七年一月吉日

序Ⅱ

著者楊春宇君は、遼寧師範大学大学院修士課程在学期間中日本に留学する機会を得て、2001年4月に北九州市立大学大学院外国語学研究科修士課程中国言語文化専攻に入学しました。修士課程在学中に私の授業科目「中国語学研究1（音声学）」を受講し、この授業で本格的に中国音韻学を学び、そしてこの分野の研究に大きな興味と深い関心を抱くようになりました。引き続き北九州市立大学社会システム研究科博士課程で明清時代の近代漢語音韻を専門に研究することを決意し、私の指導のもとで3年間強い意思と情熱をもって研究に専念し博士學位論文を完成させました。

博士論文の題目は、「社会言語学の視点からの清代漢語と他言語の対音研究—日本近世唐音資料・満語資料・ローマ字資料を中心に—」というもので、清代漢語と他言語の対音資料3種を調査対象として、社会言語学の視点を取り入れて各資料に反映された清代漢語の音韻を研究したものです。論文は、全編436ページにおよぶ大著で、序説と、三部からなる本論と、結語、参考文献一覧からなり、本論の三部の論考は、それぞれ副題に記された3種の対音資料の研究に対応しています。第一部では、黄檗宗僧侶が伝えた黄檗宗唐音と長崎の通事・商人が伝えた唐通事唐音について、それぞれの対音資料における音韻特徴と言語的性格を考察し、第二部では、満語対音の調査資料『御製増訂清文鑑』を中心に、『清文啓蒙』などを参照しながら清代漢語音を考察しました。そして第三部では、19世紀出版のローマ字表記の中国語辞典10種の資料から漢字の発音を収集し清代官話音一覧表を作成し、それに関して検討と考察を加え音韻特徴を論述しました。

本研究の長所として評価できる点は以下のようです。1) 現段階における中国の清代漢語音韻研究は伝統的な韻書・韻図資料を主としたもので、対音資料については研究が及ばず研究者の理解も不足しています。本研究は研究史上の不備・空白を埋めようとしたもので、その基礎的、本格的研究はこの分野の研究に大きな進展をもたらしたと言えます。2) 本研究で扱った調査資料は膨大なもので、これらは中国にいては入手できないか、あるいは利用することが困難なものばかりで、この点も本研究の利点のひとつとなっています。この研究でもっとも力が注がれ価値が高いのは、多くのページ数を費やして掲出された詳細な漢字音節表（資料別清代漢字音対照表とも言うべきもの）です。膨大な言語資料に取り組み、地道な努力によってこれらの音節表を作成したことは高く評価されるものであり、学界に対しすぐれた学問的貢献を果たしたと言えるでしょう。3) 主要参考文献一覧には、日本語の著書・論文、中国語の著書・

論文併せて 153 点が列挙されています。中日両国の今日までの研究成果を可能なかぎり収集し、それらを有効・適切に参照した上で学位論文を作成したその努力と研究姿勢も十分評価に値します。4) 清代漢語音の多層性・複雑性について考察し、各種対音資料がその言語的性格によって讀書音系・官話音系・南京音系・北京音系というように区別されるという指摘は一定の独自性と新規性が認められます。

問題点としては、本論の 3 部の研究が独立して行われたためか、それぞれの内容を有機的に結びつける論述が十分行われていないこと、唐音資料におけるカナ文字による漢字音表記、満語資料における満文字による漢字音表記に関してはよりいっそうの慎重な検討が望まれること、各資料別の漢字音節表およびその音韻分析に関してはもっと論じられるべき部分が残っていること、などが挙げられます。しかしこれらは本研究の欠点というより、今後の課題というべきものかもしれません。楊春宇君のさらなる研鑽とたゆまざる深化の努力を期待したいと思います。

2007 年 2 月

佐藤 昭

要 旨

中文提要

社会语言学视点下的清代汉语和其他言语的对音研究 -以日本近世唐音资料·满语资料·罗马字资料为中心-

拙著系从社会语言学的视点出发的有关清代汉语和其他言语的音韵学上的比较对照研究。全体由序说、三部分的正论、结语构成。

在序说中，针对清代汉语和其他言语的关系，本文主要从近代亚洲地域言语系统的内部构造及其变貌的社会语言学的视点加以分析。此外，对清代汉语和其他言语的对音研究的目的、意义、对象、方法等问题也予以备述。

正论分为三部分，各部分分别是以日本近世唐音资料、满语资料、罗马字资料为中心，在田野调查的基础上进行总结，并进一步和清代汉语音进行比较论述。其具体如下：

对于第一部日本近世唐音资料，为方便起见，笔者又把它进一步分成了黄檗宗唐音和唐通事唐音来考察。关于黄檗宗唐音，笔者分析了其有入声、个别字有 m 韵尾、知组章组字混合、精组字腭化、n, ng 韵尾互补分布、无声调表记等问题。此外，笔者亦对黄檗宗唐音主体黄檗宗僧侣们的籍贯、以及出于黄檗宗唐音在宗教虔诚性、传承性等方面对廉仓宋音的历时性联系等诸要素予以剖析，认为黄檗宗唐音所依据的明末清初的中国原音不是南京官话，而是文语性质浓厚的“南方官话”。换句话说，从社会语言学的视点对近世已然日本化了的黄檗宗唐音进行分析之后，笔者并不否认其作为宗教语言自身所持有着的历史传承性这一事实；另一方面，笔者认为，近代汉语发展到了明末清初，南京官话虽然日益为人们所意识，但实际上，当时所通用的不过是基于传统读书音的各地官话方言的变体而已。

关于唐通事唐音，本文在总结了其无全浊声母、微母·匣母·疑母·影母·喻母合流、知组·庄组·章组混同、个别字 n, l 母不分、精组·见晓组尚未腭化、部分资料尚有入声韵尾表记等问题的基础上，进而对唐通事们籍贯的复杂性、以及作为其工作语言有南京口、泉州口、漳州口的区别等问题加以分析，笔者认为唐通事唐音所依据的中国原音也是当时的“南方官话”。当然，我们可以认定前述的各地官话方言是以南方官话的变体形态而存在的。

作为第二部满语资料部分，本论文以《御制增订清文鉴》为中心，并参照《清文启蒙》，在与清代汉语音进行比较的基础上，得出以下结论：声母方面，关于微母合流的问题，虽然在《御制增订清文鉴》中没有显现 w、v 的区别，但在清代汉语中 w、v 母已是混同了。关于见组、精组的腭化问题，本文在对《清文启蒙》中 k、g、h 行字的“咬字念”、“诗”、“西”的注释进行分析的基础上，认为在清代汉语中相对地见组的腭化比精组要早的这一问题在此可以再次得到证实。而且，满语资料所反映的清代汉语，知组庄组已卷舌化、疑母影母字的合流业已完成，全浊声母亦不复存在。韵母方面，笔者认为满语的元音 e 表示[e/ə]两个音值，与汉语/v/韵的产生亦息息相关。《御制增订清文鉴》等满语对音资料，在某种程度上反映了当

时汉语的 er 韵已形成, y 韵尚为/iw/的阶段, 咸摄、山摄的个别入声字似乎尚有特别的表记等一系列的特征。此外, 笔者认为当时的清代汉语在轻声、儿化的形成方面也受到了满语的影响。

作为第三部在罗马字资料方面, 本论文主要是以 19 世纪所谓的南京官话和北京官话的罗马字字典、教科书资料为中心, 对当时的清代汉语音予以考察。概括说来, 因为传教士的来华与五港通商相关联, 他们对官话本质的认识是随其进京(南京, 北京)而逐渐提高的。来华初期, 他们也曾一度把广东话看作是最标准的正音。再后来, 他们所谓的官话就不仅是南京官话, 而且也包含西南官话、北京官话。因此, 本论文在对音分析的基础上, 认为清代的南京官话只不过是清代汉语标准音代表方言之一而已, 南京官话不要说是近代汉语标准语, 就连清代汉语的标准语也不是。相关的是, 在清代末期乃至民国初年, 虽然似乎可以说南京官话、北京官话朝着合流的方向发展着, 但实际上, 可以想见只要人为的强制性的统一付诸实施, 南北官话的合流仍然是不可能的。

另外, 在上述三部的正论中, 也涉及到了近代汉语乃至汉语的长短元音的问题。笔者从日本近世唐音、满语、罗马字等对音资料的视点来考察, 认为近代汉语到清代乃至民国初年的老国音阶段尚存在元音长短的区别, 近代汉语的元音的长短问题与入声的消失是纠缠在一起的。而且, 近代汉语的元音长短问题也与汉语的轻声、儿化等问题相关联。因此, 笔者认为音的长短与音的高低、音的强弱理应同视, 其是否也是与汉语发展史相关联的音韵学研究的重要的参照之一呢? 为了弄清这些问题, 笔者意识到有必要在以后的研究中继续探讨。

在结语部分, 笔者对清代汉语和其他言语的对音研究这一课题, 从社会语言学的视点加以凝视分析, 强调并深化了正论中所触及到的清代汉语音的诸多问题。而且, 面向未来亚洲地域言语系统的构筑, 对于与本书相关联的今后的研究也进行了展望。

和文要旨

拙著は、社会言語学の視点から出発して清代漢語と他言語についての音韻学的な比較対照研究をしたものである。全体的には、序説と、三部からなる本論と、結語で構成されている。

序説においては、清代漢語と他の言語との関係について、主に近世におけるアジア地域言語システムの内的メカニズム及び変容という社会言語学の視点から分析した。また、清代漢語と他言語の対音研究の目的、意義、対象、方法などについても述べた。

本論は、三部に分けて、それぞれ日本近世唐音資料、満語資料、ローマ字資料を中心に、フィールド・ワークをした上で研究を纏めて、さらに清代漢語音と対照的に論じている。具体的には、以下の通りである。

第一部においては、日本近世唐音資料を、便宜上、黄檗宗唐音と唐通事唐音に分けて考察した。黄檗宗唐音について、筆者は、主にその表記は入声があり、個別字が m 韻尾を持ち、知組章組字の混合、精組字が口蓋化され、n 韻尾と ng 韻尾の相補分布、声調が示されていないなどの問題をめぐって分析考察した。それに、黄檗宗唐音の主体である黄檗宗僧侶達の出身地や、鎌倉宋音と通時的な関連にかかわる宗教の敬虔性、伝承性などの要素をも加えて分析し、黄檗宗唐音の依拠した明末清初の中国原音が南京官話ではなく、文語的性質の濃い「南方官話」であったと判断した。また、社会言語学の視点から、近世における日本化された黄檗宗唐音に対して分析した結果、その宗教言語自体が通時的に持っていた歴史伝承性を否定できないこと、一方、近代漢語は明末清初の段階で南京官話がますます大きな存在として意識されていたものの、実際、通用されたものは伝統読書音に基づく各地官話方言の変形であったに過ぎないということを指摘した。

唐通事唐音について、本稿は、それは全濁声母表記を残していること、微母・匣母・疑母・影母・喻母の合流、知組・莊組・章組の混同、個別字は n,l 声母の区別がなく、精組・見曉組の口蓋化が現われず、一部資料に入声韻尾の表記があるなどのことを纏めた上で、さらに唐通事達の出身地の複雑性や、働き言語とした南京口、泉州口、漳州口の区別があったことなどを加えて分析し、唐通事唐音が依拠した中国原音も主に当時の「南方官話」であったと判断した。当然、これらの各地官話は南方官話の変形として存在していたのだと考えられる。

第二部においては、満語資料を、『御製増訂清文鑑』を中心とし、『清文啓蒙』などの資料も参照し、清代漢語音と比較した。そして、次のように結論を提出した。声母の場合、微母の合流について、『御製増訂清文鑑』では微母 w、v の区別が示されていないが、清代漢語は w、v 母が混同していたと考えられる。見組、精組の口蓋化問題について、『清文啓蒙』の中の k、g、h 行字の「咬字念」、「詩」「西」に対する注釈などを分析した上で、相対的に清代漢語の見組の口蓋化が精組より早かったことをここで再び証明できると考えている。また、満語資料に反映された清代漢語は知組莊組のソリ舌化が既に完成され、疑母字

も影母字に合流し、全濁声母が既になくなった。韻母の場合、満語の e 母音が[e/ə]という二つの音価をもち、漢語の /y/ 韻の産生に繋がっていたと考えられる。そして、これらの満語対音資料は、ある程度、当時の漢語の er 韻が形成されたことや、y 韻がなお /iə/ の段階にあったこと、咸摂・山摂の個別入声字がなお特別な表記を持っていたなどの一連の特徴を反映している。さらに、当時の清代漢語は軽声、兒化韻の形成においても満語からの影響を受けたと筆者は考えている。

第三部においては、ローマ字資料を、主に 19 世紀のいわゆる南京官話と北京官話ローマ字字典、テキスト資料を中心にして、当時の清代漢語音について考察した。要するに、宣教師の来華が五港の通商に繋がっていたので、彼らの官話に対する認識は彼らの上京（南京・北京）に従って次第に高められていった。来華の初期、彼らは一時的には広東語を最も標準的な正音だと見なしていたこともあった。後に、彼らのいわゆる官話は南京官話だけではなく、西南官話、北京官話なども含まれていった。そこで、本稿は、対音的に分析した上で、清代における南京官話は清代漢語標準語の代表的な方言の一つとして存在していたにすぎず、さらに南京官話は近代漢語標準語であるどころか、清代漢語の標準語であるとさえ言えないと判断した。ちなみに、清代の末期、ないしは民国初年にわたって南京官話、北京官話は合流に向かって発展していたと言われるが、人為的強制的に統一が施されなかった限り、実際には、やはり南・北官話合流は不可能だったと思われる。

また、以上の三部の本論において、近代漢語ないし漢語の長短母音の問題にも触れている。筆者は日本近世唐音、満語、ローマ字などの対音資料の考察を通して、近代漢語は清代、ないし民国初年の老国音に至るまで、なお母音の長短の区別があり、近代漢語の母音長短の区別が入声の消失に関与していたと考えている。且つ、近代漢語の母音長短の問題は漢語の軽声、兒化韻問題にも繋がっていると考えている。したがって、音の長短は音の高低、音の強弱と同じように見做されるべきであり、漢語発展史に関わる音韻学研究の重要な参照の一つであると考えられる。これらの問題を究明するために、今後の研究において、一層努力していく所存である。

結語においては、清代漢語と他言語との対音研究という問題を、社会言語学の視点から再考察することで、本論で触れた清代漢語音についての幾つかの問題を再び強調して深化させた。そして、未来のアジア地域言語システムの構築に向けて、本書に関わっている今後の研究課題についても展望を行った。

Abstract:

**Contrastive Study of Phonemes between
Qing Dynasty's Chinese and Other Languages in Sociolinguistics**

—Concentrating on Pre-Modern Chino-Japanese documents, Manchu documents and Romanized documents—

BY

Chunyu YANG

This paper is a contrastive study of phonemes between Qing Dynasty's Chinese and other languages from the viewpoint of sociolinguistics, including the introduction, the main discussion with three parts, and the conclusion.

The introduction analyzes from the viewpoint of sociolinguistics the relationship of Qing Dynasty's Chinese with the other languages regarding the internal constitution and transformation of the local language system of Pre-Modern Asia. It also explains the purpose, the significance, the objects, and the methods of this study.

In the main discussion, three parts, concentrating on Pre-Modern Chino-Japanese documents, Manchu documents and Romanized documents respectively, are developed on the basis of field investigation and these documents are further contrasted with the phonemes of Qing Dynasty's Chinese. The concrete are as follows:

In the first part, Pre-Modern Chino-Japanese documents, are further divided, for convenience, into Obaku-zen Pre-Modern Chino-Japanese and Tang-Interpreter Pre-Modern Chino-Japanese. Concerning Obaku-zen Pre-Modern Chino-Japanese I have dealt with such issues as their *entering tone* (入声), the ending of *m* for some words, the mixture of *Zhi-group* (知組) and *Zhang-group* (章組), the palatalizing of *Jing-group* (精組), the notation of complementary distribution of the “n” and “ng” ending, and the notation of no tones. In addition, I have analyzed the birth-places of monks and priests who employed Obaku-zen Pre-Modern Chino-Japanese and the religious piety and inheritance related diachronically with Kamakura Pre-Modern Chino-Japanese. So this analysis asserts that original Chinese phonemes between the end of Ming Dynasty and the beginning of Qing Dynasty that was the basis of Obaku-zen Pre-Modern Chino-Japanese is not the Nanjing's but the “southern official language” with the character of written language. In other words, when analyzing the Obaku-zen Pre-Modern Chino-Japanese from the sociolinguistic viewpoint, I do not deny their diachronically historic inheritance as the religious language. On the other hand, I argue that the standard Chinese between the end of Ming Dynasty and the beginning of Qing Dynasty was in fact a transformation of different dialects based on the traditional phonemes though “Nanjing official language” had been accepted gradually.

For Tang-Interpreter Pre-Modern Chino-Japanese, based on the analysis of the problems such as no notation of the whole-voiced constants, the junction of *v* (微母), *h* (匣母), *ʃ* (疑母), *ʔ* (影母) and *j* (喻母), the mixture of *Zhi* (知組), *Zhuang* (莊組) and *Zhang* (章組) groups, no differentiating of *n* and *l* for some words, no palatalizing of *Jing* (精組) and *Jian* (見組) *Xiao* (曉組) groups and the notation of *entering tone* (入声) endings for some materials, I analyze the diversity of the birth-places of Tang-Interpreters and the distinction of Nanjing, Quanzhou and Zhangzhou dialect as their working languages. I assert that the original Chinese as the basis of the Tang-Interpreter Pre-Modern Chino-Japanese was also the “southern official language” at that time. We can be sure that the different official languages above were merely transformations of the southern official language.

The second part, dealing with Manchu documents, centers around 御製增訂清文鑑, refers to 清文啓蒙 and concludes as follows in comparison with the Qing Chinese. In the case of consonants, as to the junction of *v* (微母), the junction of *w* and *v* had appeared in the Qing Chinese though there were no distinction of them in 御製增訂清文鑑. For the palatalizing of *Jian* (見組) and *Xiao* (曉組) groups, this paper once again demonstrates that the palatalizing of *Jian* (見組) and *Xiao* (曉組) groups were earlier than that of *Jing* (精組) in Qing Chinese by observing the enunciation of the words in the lines of *k*, *g* and *h* in 清文啓蒙 and the annotation of “*shi* (詩)” and “*si* (西)”. Moreover, the Manchu documents shows that the Qing Chinese had completed the rolling-tongue of *Zhi* (知組), *Zhuang* (莊組) and *Zhang* (章組) groups and the junction of *ʃ* (疑母), *ʔ* (影母), without the whole-voiced consonant. In the case of vowels, the vowel of *e* in Manchu language has two sounds of /e/ and /ə/, which are much related to the emergence of the /ɤ/ in Chinese. Also the materials of contrastive phonemes in Manchu language such as 御製增訂清文鑑 reflects in a degree that the rhyme of *er* in Chinese of the day had been formed, the rhyme of *y* was at the stage of /iɥ/ and the entering rhyme in some word of *Xianshe* (咸撰) and *Shanshe* (山撰) seems to have had special marking. In addition, I assert that the formation of *light voice* (輕声) and “*er voicing* (兒韻化)” in the Qing Chinese then was affected by Manchu language.

In the third part dealing with the Romanized documents, this paper studies the Qing Dynasty’s Chinese centering around the Romanized dictionary and teaching materials of the so-called Nanjing Mandarin and Beijing Mandarin in the 19th century. In brief, because the missionaries’ coming to China had trade relations with the businessmen of five ports, their knowledge of the Mandarin had been improved gradually as they came into Nanjing and Beijing. At the beginning, they once thought of the *Contonese* as the most standard Chinese. Later their so-called Mandarin included not only the *Nanjing guanhua* but also the *South-west guanhua* and the *Beijing guanhua*. Therefore, based on the contrastive analysis of phonemes, I conclude that the *Nanjing guanhua* of Qing Dynasty was merely one of the representative dialects of Qing Dynasty’s standard languages, not the standard Pre-Modern Chinese, still less the standard Qing Dynasty’s Chinese. In this connection,

though it is said that there was a tendency of fusion of the *Nanjing guanhua* and *Beijing guanhua* languages between the end of Qing Dynasty and the beginning of the Republic of China, but, in fact, it was impossible for the junction of southern and northern Mandarins without artificial mandatory unification.

In addition, I touch on the length of the Pre-Modern and Modern Chinese vowels in the main discussion. Based on the observation of the materials on the contrastive phonemes among the Pre-Modern Chino-Japanese, Manchurian words and Roman alphabets, I argue that there was the difference in the length of vowels for the phonemes of the Pre-Modern Chinese still in Qing Dynasty and even in the first years of the Republic of China, which was ended with the disappearance of the entering tone(入声). Moreover, the problem of the length of vowels of Pre-Modern Chinese is connected with the problem of the development of *light voicing*(轻声) and *er voicing*(儿化韵) of Chinese. Therefore, I assert that the length of phonemes should be paid as much attention as the pitch and the strength of Chinese and I put emphasis on the importance of it for the further study of phonemes while it is entirely focused on the study of the development of Chinese.

In the conclusion, I recapitulate the above contrastive study of phonemes between Qing Dynasty's Chinese and other languages from the sociolinguistical viewpoint, emphasize and deepen many problems concerning the phonemes of Qing Dynasty. Also, I present a vision for the related future studies for the construction of Asian local language system.

二〇〇七年二月

著者

目 次

はしがき

序 I	i
序 II	iii
要旨	v
目次	I
序説 社会言語学の視点から見た清代漢語と他言語との対音研究	1
1. はじめに：チャイニーズ・ガーデン散策	1
2. 天問洪荒：原始漢語はどのように形成されたのか——漢語と他言語の対音研究の原点の発掘	1
3. 挪亞方舟：漢字文化圏及びアジア社会秩序——漢語と他言語の対音研究の社会言語学意義の探索	2
3.1. 中華同心円思想と「華夷秩序」：アジア地域言語システムの形成原理の追究	2
3.2. 漢字文化圏——アジア地域言語システム及びその歴史的な二元構造の解析	3
3.3. 「華夷変態」：文化衝突の現代反省——アジア地域言語システムの近世的変容	4
4. 音韻闡微：近代漢語音研究の幾つかの問題及び清代漢語音の特徴——清代漢語と他言語の対音研究価値の管見	8
4.1. 近代漢語音研究の当面する幾つかの問題	8
4.2. 清代漢語音の音韻特徴	11
5. 滄海一粟：対音、対音資料及び対音研究のスケッチ——本論の研究範囲及び研究対象	12
6. おわりに：清代漢語と他言語の対音研究の凝視と展望	15
その他の参考文献	16
第一部 清代漢語と日本近世唐音との対音研究	17
第一章 序論	17
1.1. 日本漢字音について	17
1.2. 唐音発微——唐音の呼称・性質及び影響	17
1.2.1 唐音という呼称は？	17
1.2.2 唐音の性質	18
1.2.3 唐音の影響	19
1.3. 黄檗宗唐音について	20
1.4. 唐通事唐音について	22
1.5. 先行研究	24

1.6. 本稿の資料	25
1.6.1 黄檗宗唐音の資料	25
1.6.2 唐通事唐音の資料	26
第二章 黄檗宗唐音と明清交替期の呉・閩方言及び「南京官話」	26
2.1. はじめに	26
2.2. 黄檗唐音と鎌倉宋音	28
2.2.1 諷誦宋音と黄檗唐音の声母表記及び音価対比	29
2.2.2 諷誦宋音と黄檗唐音の韻母表記及び音価対比	32
2.2.3 まとめ	39
2.2.3.1 声母について	39
2.2.3.2 韻母について	40
2.2.3.3 黄檗宗唐音音価配合関係表について	44
2.3. 黄檗唐音と明清交替期の福州音、杭州音、南京音及び「南京官話」	48
2.3.1 黄檗唐音と明清交替期の福州音、杭州音、南京音と「南京官話」の調査	48
2.3.1.1 果摂について	49
2.3.1.2 仮摂について	51
2.3.1.3 遇摂について	54
2.3.1.4 蟹摂について	57
2.3.1.5 止摂について	62
2.3.1.6 効摂について	66
2.3.1.7 流摂について	71
2.3.1.8 咸摂について	75
2.3.1.9 深摂について	80
2.3.1.10 山摂について	83
2.3.1.11 臻摂について	94
2.3.1.12 宕摂について	100
2.3.1.13 江摂について	106
2.3.1.14 曾摂について	108
2.3.1.15 梗摂について	111
2.3.1.16 通摂について	117
2.3.2 黄檗宗唐音をめぐる漢語対音分析の一：声母を中心に	122
2.3.3 黄檗宗唐音をめぐる漢語対音分析の二：韻母を中心に	123
2.3.4 黄檗宗唐音をめぐる漢語対音分析の三：声調を中心に	124
2.3.5 まとめ：黄檗宗唐音についての音節表	124
2.4. おわりに：黄檗宗唐音の性質	133